

主要出陳資料・一覧（吉野町管内に所有者がいる文化財は、備考欄に文化財指定である旨明記しています）

1. 紫式部と『源氏物語』～その後の展開を含む

資料名など	作者・訳者ほか	種類	原本成立時期	備考
日本絵巻大成 1 源氏物語絵巻 寝覚物語絵巻	小松茂美 解説	図書	平安	館蔵
更級日記	西下経一 校注	図書	平安	館蔵
花鳥余情	一条兼良	図書	室町	原本重文、個人
源氏物語補作 山道の露・雲隠六帖他 2 編	今西祐一郎 編注	図書	鎌倉～江戸	個人
修紫田舎源氏	柳亭種彦	図書	江戸	個人
好色一代男	井原西鶴	図書	江戸	個人

	図書名	作者・訳者ほか	種類	所蔵
紫式部	平安時代にタイムスリップしたら紫式部になってしまったようです	中臣悠月	小説	個人
	光る君へ 前編 (NHK大河ドラマ・ガイド)	大石静、NHKドラマ制作班	図書	個人
	紫式部	谷口孝介ほか	マンガ	個人
	平安あかしあやかし陰陽師	こはく ほか	マンガ	個人
	超訳 百人一首 1巻	杉田 圭	マンガ	個人
	清明はがんばらない	方條ゆとり	マンガ	個人
	パープル式部	フォビドゥン澁川	マンガ	個人
	暴れん坊少納言	かかし朝浩	マンガ	個人
	姫のためなら死ねる	くずしろ	マンガ	個人
	神作家紫式部のありえない日々	D・キッサン	マンガ	個人
源氏物語	パタリロ源氏物語	魔夢峰央	マンガ	個人
	はやげん!	花園あずき	マンガ	個人
	源氏物語	長谷川法世	マンガ	個人
	月下の君	嶋木あこ	マンガ	個人
	黒源氏物語	桜田雛	マンガ	個人
	マンガでわかる源氏物語	砂崎良	マンガ	個人
	ラブバック1	大和和紀	マンガ	個人
	源君物語	稲葉みのり	マンガ	個人
	源氏物語 千年の謎	宮城とおこ	マンガ	個人
	源氏物語 愛と罪と	森猫まりり	マンガ	個人
	いいね! 光源氏くん	えすとえむ	マンガ	個人
	源氏ものがたり	美桜せりな	マンガ	個人
源氏物語	江口達也	マンガ	個人	
あさきゆめみし	大和和紀	マンガ	個人	
まる、ん?	小泉吉宏	マンガ	個人	

	図書名	作者・訳者ほか	種類	所蔵
	源氏物語	赤塚不二夫	マンガ	個人
	源氏物語 美しの花乱	井出智香恵	マンガ	個人
	TALE OF GENJI		マンガ	個人
	GENJI 源氏物語	きら	マンガ	個人
	知泉源氏	杉村喜光	マンガ	個人
	十二単衣を着た悪魔	内館牧子	小説	個人
	平安後宮の薄紅姫	遠藤遼	小説	個人
	光源氏と不機嫌な花嫁 初恋は葵の秘めごと	春秋子	小説	個人
	潤一郎 新々訳 源氏物語	谷崎潤一郎	小説	個人
	与謝野晶子の源氏物語	与謝野晶子	小説	個人
	源氏物語	大塚ひかり	小説	個人
	源氏物語 時の姫君 いつか、めぐりあうまで	越水利江子	小説	個人
	愛する源氏物語	俵万智	小説	個人
	源氏物語 姫君、若紫の語るお話	石井睦美	小説	個人
	源氏物語	高山由紀子	小説	個人
	源氏物語	A・ウェイリー	小説	個人
	源氏物語	円地文子	小説	個人
	源氏物語	瀬戸内寂聴	小説	個人
	THE TALE OF GENJI	Lady Murasaki	小説	個人
	望月のあと 覚書源氏物語『若菜』	森谷明子	小説	個人
	源氏物語	窪田空穂	小説	個人
	窠変 源氏物語	橋本治	小説	個人
	源氏物語	今泉忠義	小説	個人
	源氏物語	いしいげんじ	小説	個人
	源氏物語 あやとき草子 1巻	遠藤 遼	小説	個人
	平安姫君の随筆がかり	遠藤 遼	小説	個人
	新源氏物語	田辺聖子	小説	個人

2. 藤原道長の金峯山詣で

資料名など	作者・訳者ほか	種類	原本成立時期	備考
藤原道長	京都国立博物館	図録	江戸	個人
金峯山経塚遺物の研究	皇室博物館	図書	昭和	個人
義楚六帖	義楚	図書	平安	個人
栄華物語 上 (日本古典文学大系)	松村博司 ほか校注	図書	平安	館蔵
藤原道長「御堂関白記」上巻	倉本一宏 全現代語訳	図書	平安	個人
大日本古記録 第10 小右記・小記目録下・編年小記目録	東京大学史料編纂所	図書	平安	個人
金銅藤原道長経筒	—	館作模造	—	現品は国宝

	図書名	作者・訳者ほか	種類	所蔵
道長	この世をば	永井路子	小説	個人
	月と日の后	沖方丁	小説	個人
	紀伊半島 大峰山奥駈道 1. 全体概況編 (村井測量設計)		図書	館蔵

	図書名	作者・訳者ほか	種類	所蔵
道長	わかむらさき	池野恋	マンガ	個人
	神作家紫式部のありえない日々	D・キッサン	マンガ	個人
	紫式部はさからえない	真己京子	マンガ	個人
	清少納言と申します	PEACH-PIT	マンガ	個人

3. 平安文学で表現された吉野

資料名など	作者・訳者ほか	種類	原本成立時期	備考
とりかへばや物語	不詳	図書	平安	館蔵
日本霊異記	景戒	図書	平安	館蔵
今昔物語	不詳	図書	平安?	個人
枕草子 (日本古典文学全集)	松尾聡 ほか校注訳	図書	平安	個人

主要参考文献（本文中で紹介したものは除く）

図書名	作者・訳者ほか	出版社	刊行年	形式
金峯山寺史	首藤善樹	総本山金峯山寺	2004	図書
藤原行成「権記」上	倉本一宏	講談社学術文庫	2011	文庫
藤原道長の権力と欲望「御堂関白記」を読む	倉本一宏	文春新書	2013	新書
藤原道長の日常生活	倉本一宏	講談社現代新書	2013	新書
源氏物語 (新潮日本古典集成 新装版)	紫式部 ほか	新潮社	2014	図書
源氏物語を知る辞典 新装版	西沢正史 編	東京堂出版	2023	図書

令和6年 吉野歴史資料館特別陳列

光ありとみし

平安文学と藤原道長でみる吉野

— 陳列解説資料 —



【企画・展示】吉野歴史資料館 【会期】令和6年3月16日～12月1日(予定) ※本紙作成には、イラスト AC、カシミール3Dを利用しています。

2024年は「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に認定されて20周年、そして、吉野山が国指定の遺跡など（史跡・名勝）になって100周年にあたります。「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部にあたる吉野山は、今年の大河ドラマ「光る君へ」で紹介される平安時代、多くの方が信仰の目的で訪れた場所でありました。そのため『源氏物語』の中で、その信仰の一端がうかがえるほか、吉野町管内に金銅藤原道長経筒などの国指定文化財がのこります。この陳列では『源氏物語』を起点に、藤原道長と吉野とのかわりや平安時代頃の吉野観、さらには関連する文学作品や文化財の情報などをご紹介します、世界遺産20周年・吉野山史跡名勝指定100周年を祝いたいと思います。

1. 『源氏物語』の展開と吉野

令和6年は『源氏物語』の作者・紫式部の生涯を描く大河ドラマ「光る君へ」が放映されます。『源氏物語』は、日本だけでなく世界中で読み継がれてきた、著名な古典作品の一つです。たとえば、『更級日記』の「かどで」(寛仁4(1,020)年)では、『源氏物語』にあこがれる思いがつつられています。その後も、日本に限っても様々な時代に解説書（例えば、重要文化財として国に指定されている『花鳥余情』など）がつけられてきました。また、鎌倉時代以降には、続編がつけられたり（例えば、『山道の露』や『雲隠六帖』）、リメイクやオマージュ作品がつけられています（例えば、『修紫田舎源氏』や『好色一代男』）。現代では、マンガ版の『源氏物語』や現代語訳、解説書がつけられるなどしています。

もしかすると皆様も、小説やマンガなどで、知らず知らずに『源氏物語』にふれていた、という経験をおもちなのではないでしょうか？

さて、そんな『源氏物語』ですが、吉野を指す言葉がワンフレーズだけ、出てくるのをご存じですか？それは、「夕顔の段」で登場するのですが…。まずは、その部分のみを抜粋してご紹介します。ただ、「吉野」と直接は書かれていないので、どの言葉が吉野を指しているか、探してもらえると幸いです。

明け方も近うなりにけり。鳥の声などは聞こえて、御嶽精進にやあらん、ただ翁びたる声に頼づくぞ聞ゆる。起居のけはひたへがたげに行ふ。いとあはれに、朝の露にことならぬ世を、何をむさばる身の祈りにか、と聞きたまふ。南無当来導師とぞなむ拝むなる。「かれ聞きたまへ。この世とのみは思はざりけり」と、あはれがりたまひて、

優婆塞が 行ふ道を するべにて
来む世も深き 契りたがふな
長生殿の古きためしはゆゆしくて、羽をかわさんとひきかえて、弥勒の世をぞかね給う。行く光の御たのめ、いとこちたし
先の世の 契しらるる 身のうさに
行すえかねて たのみがたさよ
かよのすぢなども、さるはこころもとなかめり。

さて、吉野を指す言葉がどれか、お気づきになりましたか？当時、吉野・大峯は御嶽や金峯山と呼ばれ、御嶽精進とよばれる精進潔斎をしなければ登ることができませんでした。そして、御嶽（金峯山）に登った人物の一人に「光る君へ」の重要登場人物の一人、藤原道長がいたのです。

2. 藤原道長が吉野を目指した理由

【道長の半生と御嶽（金峯山）詣】

—この世をば 我が世とぞ思ふ 望月の
欠けたることも なしと思えば

藤原道長といえば、この和歌が有名でしょう。ゴーマンなボンボンとお思いの方も多いのではないのでしょうか。ただ、実際の道長は五男坊で、本来、出世の見込みはありませんでした。それが、父の出世、姉の入内、有力者・長兄らの病死が重なり、本人が望む望まざるに関わらず、どんどん出世していったのです。『御堂関白記』では、道長の心中がうかがえる文章があります。

当時は、自身が出世できるどうかの子孫にも影響した時代。結果、道長は長兄の息子・伊周と出世争いを繰り広げていきます。道長が御嶽（金峯山）に詣でた当時、道長の娘・彰子は当時的一条天皇に嫁いだばかりでした。一方、ライバル伊周は、妹の定子がすでに一条天皇に嫁いでいて、しかも一条天皇の子を懐妊していた

のです。ライバルに出世争いで出遅れた状態、それが御嶽詣でを行った時点での道長でした。

【道長の時代の御嶽（金峯山）】

ここで藤原道長が生きた当時の吉野観を確認しておきましょう。『義楚六帖』によると、金峯山は金剛蔵王菩薩が守る山で、金剛蔵王菩薩は弥勒菩薩の化身とあります。（『源氏物語』でも御嶽精進と関わって、「当来導師＝弥勒菩薩」と出ています。）そして、大小の寺がたち、高僧が住み、男子が登ろうと思えば三カ月間、酒肉欲色を断つ必要がありました（御嶽精進）。登ること（御嶽（金峯山）詣）ができた者は、皆願いが達せられたといえます。

もしかしたら、道長にとって御嶽（金峯山）詣は一世一代の大勝負だったのかもしれませんが。当時は仏教の信仰厚く、「功德」が重視された時代。自身の功德をつみ、娘の出産を願うためにも、御嶽詣は悲願だったことでしょう。



藤原道長の御嶽（金峯山）詣の推定ルート

3. 御嶽にのぼった藤原道長、道長が得た御嶽の功德

藤原道長の御嶽詣は、自身の日記『御堂関白記』や藤原行成の日記『権記』、物語風史書『栄華物語』などに記録がのこります。ちなみにこの時、『小記目録』によると、道長の暗殺計画もあったようです。

御嶽に登った道長は、有名な金銅藤原道長経筒にくつつかのお経を納め、御嶽山頂に埋納しました。そこで願った内容は、経筒の銘文に書かれている通りです。

また、銘文には書かれていませんが、彰子の懐妊も願ったことでしょう。

道長の御嶽詣の翌年、道長の娘・彰子是一条天皇との間に子供を授かります。『栄華物語』などでは、御嶽詣の翌年に彰子が身籠ったことを「御心のうちには「御嶽の御験(しるし)にや」とあわれに嬉しうおぼさるべし」と記しています。

南瞻部洲大日本国左大臣正二位藤原朝臣道長百日深齋率信心道俗若干人以寛弘四年秋八月上金峯山以手自奉書寫妙法蓮華經一部八卷无量義經觀音菩薩各一卷阿彌陀經一卷弥勒經上生下生成仏經各一卷般若心經一卷合十五卷納之銅篋埋于金峯山上立金銅

タ	ク	リ	カ	リ	ダ	ハ	マ	ダ	サ	ボ	ナ	
(梵字)	陀	覽	素	迦	利	陀	芬	麼	曇	婆	漢	南*

南瞻部洲大日本国左大臣正二位藤原朝臣道長、百日深齋、率信心道俗若干人、以寛弘四年秋八月、上金峯山、以手自奉書寫妙法蓮華經一部八卷、无量義經、觀音菩薩各一卷、阿彌陀經一卷、弥勒經一卷、上生下生成仏經各一卷、般若心經一卷、合十五卷、納之銅篋、埋于金峯山、上立金銅燈樓、奉書燈、始自今日期龍華之晨、於是弟子焚香、合掌白藏王而言、法華經者、是為奉報釋尊恩、為值過弥勒親近藏王、為弟子无上菩提、先年奉書欲齋奉之間、依世間病惱、事予願達、為恐浮生之不定、且於京洛供養先了、今猶所以埋於茲者、蓋償初心、復始願之志也、阿彌陀經者、此度奉書、是為臨終時、心身不散乱、念弥陀尊、往生極樂世界也、弥勒經者、又此度奉書、是為除九十億劫生死之罪、證无生忍、遇慈尊是出世也、仰願、當慈尊成佛之時、自極樂界、往詣佛所、為法華會聽聞、受成仏記其庭、此所奉埋之經卷、自然湧出、令會衆咸隨喜矣、弟子得宿命通、知今日事、如智者之記靈山於前會、文殊之識往劫於須臾者歟、嗚呼發菩提心、懺悔重罪、運東阿之匪石、加南山之不鷲、埋法身之舍利、仰釋尊之哀愍、藏信心之手跡、憑龍神之守護、願根已固、我望已足、抑懇一樹之蔭、飲一水之流、猶不足小緣、况此之道俗若干人、或有以香花手足、與此善者、或有以翰墨工藝從事者、南無教主釈迦藏王推現知見證明、願予人力圓滿弟子願、法界衆生依此津梁、皆結見佛聞法之緣、弟子道長敬白、

寛弘四年 丁未 八月十一日

※：南無妙法蓮華經の意味

3.5 当時、吉野を訪れた著名人たち

平安時代、吉野を訪れたのは藤原道長だけではありません。宇多上皇、菅原道真、聖宝などが吉野を訪れた。また、藤原道長も吉野山のほか、治安3（1023）年に竜門を訪れています。この時期の主な来訪者は以下の年表のとおり。

年	内容	出典
昌泰元 898	宇多天皇、菅原道真らとともに宮滝・竜門行幸。	『扶桑略記』
延喜5 905	宇多法皇、金峯山御幸	『日本紀略』ほか
延喜6 906	聖宝、金峯山に堂を建て、吉野川に渡し船をもうける	『聖宝僧正伝』ほか
天慶4 941	日蔵、笹の岩屋で修行中に絶命し、冥土めぐりをする	『道賢上人冥土記』ほか
天慶8 954	『義楚六帖』、なる	
天徳4 960	京都の内裏炎上し、左近の桜が吉野山の桜になる	『帝王編年記』
安和2 969	藤原兼家、息子の道綱を伴って御嶽詣でを行う	『蜻蛉日記』
正暦1 990	右衛門佐藤原直孝（紫式部の夫）、御嶽詣	『枕草子』
長徳4 998	藤原道長、金峯山に埋経をするため写経	経典の奥書
寛弘4 1007	藤原道長、御嶽詣	『御堂関白記』
寛弘8 1011	藤原道長、再び御嶽詣を計画するが断念	『御堂関白記』
治安3 1023	この頃、『更級日記』で吉野の尼君を思う歌が詠まれる 藤原道長、竜門寺参詣	『更級日記』 『扶桑略記』
永承4 1049	藤原頼通（道長の息子）、御嶽（金峯山）参詣	『扶桑略記』
寛治2 1088	藤原師通（道長のひ孫）、御嶽（金峯山）詣	『後二条師通記』
寛治4 1090	藤原師通、御嶽（金峯山）詣	『後二条師通記』
寛治6 1092	白河上皇、御嶽（金峯山）詣	『中右記』、『後二条師通記』

4. 平安時代の文学作品にあらわれる吉野

『浜松中納言物語』、『とりかへばや物語』などで吉野が舞台として登場します。また、『枕草子』には「あはれなるもの」で御嶽精進の話が紹介されています。『日本霊異記』「禅師の食わんとする魚、化して法華経とな

りて俗のそしりを覆す縁』、『今昔物語集』「大峯を通る僧、酒泉郷に行きし語」では吉野での霊験ある話がかかれていて、こうした物語をみると、吉野はみやこの人たちから神秘的な場所とみられていたようです。

5. まとめ

『源氏物語』、藤原道長たちの参詣、そして平安時代の文学作品などを見ながら、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一角になう吉野山が、千年前にどのような霊場と見られていたのかをご紹介します。今では気軽に登れる吉野山も、昔は3か月もの準備期間が必要だったなんて意外ではないでしょうか。

吉野町管内には今でも、『源氏物語』や藤原道長らの参詣にまつわる文化財や伝承などがのこります。いずれも、所有者や地元の方々が大切に守り伝えてきたものです。地域の誇りとして、こうした文化財や伝承が、今後も大切に守り伝えられていくことを願っています。

